

A年被献日 ルカ2章22—40節

〔直訳〕

22 そして 満ちたとき 彼らの清めの日々が モーセの律法に従って、

連れて上った 彼を エルサレムへ 主に献げるために、

23 書かれていますとおりに 主の律法に 次のが

「胎を開いた男児は皆 主のために聖だと 呼ばれるだろう」、

24 そして 犠牲を与えるために 主の律法に言われていたことに従って、

「山鳩のつがいがあるいは 一二羽の家鳩の雛を」。

25 そして 見よ 人が いた エルサレムに その者の 名は シメオン

そして この人は 正しく そして 信仰深い

待ち望みながら イスラエルの慰めを、

そして 霊が あった 聖なる 彼の上に。

26 そして 彼に 示されていた 聖なる霊によって

見ることがない 死を 彼が見る前に 主のメシアを。

27 そして 彼は来た 霊において 神殿へ。

そして 連れて入ったときに 両親が 幼子イエスを

行なうために 彼らが 律法の慣例に従って 彼について

28 そして 彼は 受けた 彼を 腕に、

そして 彼は 祝福した 神を そして 彼は言った、

29 「今 あなたは去らせる あなたの僕を、主人よ、

あなたの言葉に従って 平和のうちに。

30 というのは 見た 私の目は あなたの救いを、

31 ところの あなたが準備した すべての民の顔に向けて、

32 光を 異邦人たちの啓示のための

そして 誉れを あなたの民イスラエルの。」

33 そして 彼の父と母は 驚いていた

話されたことに 彼について。

34 そして 祝福した 彼らを シメオンは

そして 言った 彼の母マリアに向かつて、

「見よ 彼は 置かれている 倒れることと立つことのために

多くのものの イスラエルの中で

そして するしのために 反対されるはずの

35 そして 「だが」 あなた自身の魂を さし貫くだろう 剣が、

a

b

c

現されるために 多くの者の心から 思いが」。

36 そして いた 女預言者アンナが、ファヌエルの娘、アシエル部族からの。

彼女は すすんで 多くの日々において、

生きて 夫と共に 七年 彼女の処女から、

37 そして 彼女は 未亡人 八十四年まで、

その彼女は 離れていなかった 神殿から 断食と祈りで

奉仕しながら 夜と昼。

38 そして この時に 脇に立ち 彼女は公に賛美していた 神を

そして 彼女は話していた 彼について

待ち望んでいるすべてのものに エルサレムの解放を。

39 そして 彼らが終えたとき 主の律法に従ってのことをすべて、

彼らは帰った ガリラヤに 彼ら自身の町ナザレに。

40 だが幼子は 成長していった

そして 強くなっていった 知恵に満ちつつ、

そして 神の恵みが あった 彼の上に。

a'

「新共同訳」

22 さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23 それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24 また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが「霊」に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

31 これは万民のために整えてくださった救いで、

32 異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

33 父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。34 シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35 —あなた自身も剣で心を刺し貫かれます—多くの人の心にある思いがあらわにされるため

す。」

36 また、アシエル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとつていて、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、37 夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、38 そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。
39 親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。40 幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

①構成

①a 22—40節は28—35節を中心軸としてその前後が対応するような形、コンチェントリック（求心的）な構成で作られている。22—24節（a）では両親が「主の律法」の規定に従い、幼子を主に献げるためにエルサレム神殿に上ったことが語られる。この22—24節と対応するのが、最後の段落39—40節（a'）であり、「主の律法」の定めを終えた両親がナザレに戻ったことを述べている。22—24節（a）と39—40節（a'）とを対応させる言葉は、「主の律法」である。両親は「主の律法」に従ってエルサレム神殿に上り、「主の律法」を果たすと、生活の場ナザレに帰る。

①b 25—27節（b）には「イスラエルの慰めを待ち望む」シメオンが登場し、「神殿」に入った彼は、イエスに出会う。この25—27節に対応するのは、36—38節（b'）であり、そこには「神殿」から離れずに生きてきた女預言者アンナが幼子を知って、それを「エルサレムの解放を待ち望んでいる」人たちに語りかける。「神殿」と「待ち望む」によって、bとb'とが対応することになる。ルカにとって、「待ち望む」老人、シメオンとアンナは、旧約と新約とを結ぶ掛け橋となる人物である。しかも、ルカは彼らを神の前に共に並んで立つ男女として描くことによって、男と女は榮譽と恵みにおいて同等であり、同じ力を授けられ、同じ責務を負っていると説いている。

①c 慰めと解放を「待ち望む」人々について述べたbとb'には含まれた28—35節が中心軸となる。ここでは、シメオンが神を「たたえ」、両親を「祝福し」ている。この「たたえ」と「祝福する」は原語では同じ動詞エウロゲオーであるので、直訳ではどちらも「祝福する」と訳している。

②「主の律法」のためにエルサレムへ（22—24節）

②a 両親は幼子を「モーセの律法」に従って主に献げるために、また「主の律法」のとおり、初子を聖別し（出13:1—2、民18:15—16）、また産婦を清める（レビ12:8）いけにえを献げるために、エルサレムへ上って行った。ここでの動きはナザレ（下）からエルサレム（上）へと向かっている。

③「待ち望む」人シメオン（25—27節）

③a この段落ではシメオンに焦点が当てられる。彼はイスラエルの慰めを「待ち望む」人である。彼が待ち望む慰めは、26節に「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない」とあるように、メシアの到来にある。このシメオンはメシアへの期待を胸に、聖霊に導かれて「神殿へ」入る。舞台はエルサレム市内から神殿へと集中してゆく。

④ 神殿の中で (28—35 節)

① シメオンが神殿に入ると、両親に出会い、幼子を腕に「受ける」。「受ける」という語には、神の国や御言葉を「信じて受け入れる」という意味もある。シメオンは幼子をただ腕に抱いたのではなく、メシアを「受けた」のである。彼は待ち望んだメシアを受けたので、まず 29—32 節で神を「たたえる (祝福する・エウロゲオー)」。彼は「私の目はあなたの救いを見た」と歌って、幼子もたらす「救い」を喜ぶ。それは異邦人にとっては「啓示の光」であり、その光を世界に輝かすイスラエルの「誉れ」である。

② 両親はこの言葉を聞いて「驚いていた」と書かれている。だが、この驚きは単なる戸惑いではない。驚きが探究心を刺激し、より深い認識へと導くこともある。シメオンの言葉に「驚いた」両親も、幼子と共に生きることによって、その意味を悟ることができる。

③ シメオンは、驚いている両親を「祝福する」。「祝福する」と訳されるエウロゲオーは、接頭辞エウ (良く) と動詞ロゲオー (語る) の合成語であり、普通のギリシア語としては「うまく話す・誉める」を意味するが、聖書では七十人訳 (紀元前 3—2 世紀頃にギリシア語に翻訳された旧約聖書) の影響を受け、きわめて限定した意味で使われる。この語は七十人訳ではヘブライ語バラーフの訳語として使われる。バラーフは、神に使われれば「健やかにする力のあるもの」として神を認める「たたえる」の意味であり、人に使われれば「健やかにする力をその人に与える」祝福する」の意味になる。シメオンが神をたたえ、両親を祝福することができる根拠は、彼の腕に抱かれたイエスにある。イエスは神が万民のために整えた救いであるから、この救い主を腕に「受けた」シメオンは、神に賛美をささげ、両親には祝福を語ることができる。彼の腕の幼子が神と人とを結ぶきずなだと知ったからである。その喜びが、救いを「待ち望んでいた」人すべてに伝播していく。

④ シメオンはマリアに幼子は「反対を受けるしるし」だと語りかける。確かに彼は人々に「光」と「誉れ」をもたらすが、それは平坦な道を通して起こるのではない。むしろ、「反対を受けるしるし」となることによってもたらされる。幼子は確かに「尊いかなめ石」(1ペト二 6) であるが、それが「つまずきの石」(1ペト二 8) となってしまう者もいる。イエスを受け入れる者は、イエスによって立ち上がるが、イエスにつまずく者は裁かれて倒れる。イエスは人々の「心の思い」が現されるしるしである。

⑤ 母マリアは幼子と苦しみを共にするようにと招かれている。しかも、その苦しみは、救われる者と滅びる者を識別する「剣」(エゼ一四 17) から来る苦しみでもある。シメオンが「受け入れ」、彼の腕に抱かれている幼子にどのような態度を取るかが、人々の運命を決定する。幼子は人を裁き分ける「剣」であるが、模範的な信仰者であるマリアもイエスにおける神の啓示を受け入れるかどうか態度決定を迫られる。

⑤ 「待ち望む人」に救いを告げるアンナ (36—38 節)

① 神殿にはアンナもいた。彼女は幼子に出会おうと、エルサレムの解放を「待ち望む」すべての人にこの幼子のことを語るために「神殿から」出て行った。ここで動きは、「神殿へ」の動きから「神殿から」の動きに逆転する。

⑥ 「待ち望む（プロステコマイ）」は、新約聖書で合計 14 回使われ、ルカ文書での用例が半数を占めている（ルカ 5、使 2）。この語はまず「受け入れる」の意味で使われ、人を客として迎え入れて「歓迎する」ことを表す。目的語が人物以外であれば、何かを（喜んで）受け入れる、耐え忍ぶ」ことを表す。否定詞と一緒に使われれば、「受け入れることを拒む、拒否する」の意味になる。次に、「待ち望む」の意味で使われるが、人物を目的語とする用例は一例であり、「誰かを待つ」の意味である（ルカ 12:36）。しかし、大多数は人物以外の事物を目的語として「何かを待ち望む」ことを表す。だが、どちらにしても、信仰をもってあきらめずに待つ態度を表すことでは同じである。待つべき対象は、帰宅する主人であり（ルカ 12:36）、神の国であり（マコ 1:5、ルカ 13:51）、復活の希望であり（使 24:15）、イエス・キリストの栄光の現れであり（テト 2:13）、神の憐れみである（ユダ 21）。

⑦ 25 節と 38 節の「待ち望む」は、いずれも救いを待ち望むことを表す。25 節にはイスラエルの慰めを「待ち望む」シメオンが登場し、38 節にはエルサレムの解放を「待ち望んでいる」人々に幼子の到来を告げる女預言者アンナが登場する。この慰めは、預言者イザヤを通して約束されていたように（イザ 40:1 など）、罪を赦し、民を憐れむ神が出来事を通してもたらす慰めである。だから、言葉だけの同情ではなく、状況の変革に基づく慰めである。人を苦しめ、悲しませる根本原因を神が取り去り、まったく一新された現実を人に与える。この一新された現実によって、慰めは引き起こされる。

⑧ 罪を赦す神の憐れみは、シメオンが腕に受けた幼子となって現れている。霊に満たされたシメオンは、イエスがもたらす救いを先取りして、「わたしはこの目であなたの救いを見た」と喜びを言い表す。待ち望んでいたものを目にしたからである。イエスの誕生は救いを待ち望む者には大きな喜びである（2:10）。この喜びに促されて、シメオンは喜びを歌い、アンナは神殿から人々のもとへと出て、良い知らせを宣べ伝える。

⑥ 「主の律法」を果たしてガリラヤへ（39 節）

① 幼子に関する「主の律法」を果たして、ガリラヤへ両親は戻る。律法を全うした幼子は、律法という道とは異なる道を救いのために整える。この道は両親にとっても信仰を試される道である。

⑦ 神への賛美と人々への祝福

② シメオンが腕に受けた幼子は、神と人をつなぐ絆である。人間がみずから断ち切った契約の絆が、神によって新たに結び直される（エレ 31:31 以下）。幼子は神と人をつなぐ「新たな契約」である。それを知ったシメオンは、神への賛美と両親への祝福によって、その喜びを表している。神と人が新たに結ばれたことへの喜びが、救いを待ち望む人々を、神の恵みに招く力となっている。救いを「待ち望んでいた」者は、イエスの誕生によって、神への「賛美」と人々への「祝福」を手にしたのである。

③ この救いを目の当たりにしたシメオンは、死ぬのではなく、「去って行く」。なぜなら、幼子を「受ける」者の死は、新たないのちへの死だからである。彼の言葉に「驚いた」両親も、そして私たちも、光である幼子の神秘を悟るように招かれている。驚きこそ、神が与える救いを受け出る出発点となるからである。